

# 九死に一生を得て

しまさき じろう  
島崎 治郎

# 九死に一生を得て

氏名 しまさき 島崎 じろう 治郎（被爆時満14才）

当時の職業 学生（広島県立広島第二中学校3年生）

被爆当時の住所 広島県賀茂郡西条町

被爆場所 広島市南観音町総合グラウンド附近

## ■ 8月6日の様子

私は当時、西条から汽車、市内電車を乗り継ぎ1時間以上かけて南観音町の三菱重工業(株)広島機械製作所へ学徒動員のため通勤していました。私は、5人きょうだいの4番目。兄1人、姉2人、下に妹がいます。兄は九州の軍隊に出ていました。

私が二中（広島県立広島第二中学校）の2年生の時から、授業はなくなり、あちこちの工場に回されました。昭和19年の終わり頃から三菱の観音工場へ通勤するようになりました。

8月6日当日は、学友、4、5名と工場へ向かう途中被爆しました。場所は、南観音町の総合グラウンド附近だったと思います。爆心地から約4キロの距離です。もし私が一本遅い電車に乗っていたら原爆投下時刻には、電車の中にいて相

おいぼし生橋で直爆死していたでしょう。九死に一生という感じです。

被爆の瞬間は、背中からピカッと光を受けました。首が熱かったことを覚えています。そして強烈な爆風の後、私はひっくり返り気を失いました。気絶して5分ぐらいで目を開けました。見まわすと、爆心地から4キロ離れているのに工場は鉄骨だけ残り、屋根が吹き飛んでいました。

一体何が起こったのだろうか。動員先の工場がB29の爆撃を受けたのではないか。いや、B29の爆撃を受けたのではなく、あれは、みなみまち皆実町のガスタンクが爆発したのではないだろうかと学友の中でも意見が分かれました。警戒警報は解除になっていたはずです。8時15分は、無警戒の状態でした。8時前に空襲警報は1回ありましたが、警戒警報に変わり、8時5分くらいに警報が

解除されました。解除のサイレンも聞きました。

その後、「市内が全部、大火事になっているから、とにかく今日は、来た者は自分の家に帰りなさい」という指令が出ました。黒い雨が降るなか東へ進みました。江波<sup>えば</sup>へ渡り、吉島<sup>よしじま</sup>、千田<sup>せんだ</sup>へたどり着き、さらに比治山<sup>ひじやま</sup>方面へ御幸橋<sup>みゆきばし</sup>を渡りました。御幸橋を渡る時、たくさんの人に足を引っ張られました。「水をくれ、水をくれ」と言っています。私は人が、けがをしているなどぐらいにしか思いませんでした。なぜならどうしてたくさんの人がけがしたりヤケドしたりしているのかまだ見当もつかなかったからです。「お兄ちゃん、水くれ、水くれ、けがしたから、のどが…」と引っ張られても恐ろしいばかりでした。私は幸いにも被爆時に負傷がなかったので、多くの傷ついた人を目の前にして、ただ狐<sup>きつね</sup>につままれたような足取りで進むしかありませんでした。

比治山の下を通った時、記憶に残っているのは真っ赤な体の兵隊さんです。全部皮がたれさがっていました。息はされていたのですが、それはむごい姿です。私を見て死体を指さし「これ、リヤカーに乗せて運ぶので、お兄ちゃん、足の方、ちょっと持ってきてくれ」と言います。私は、こわくて、できませんでした。比治山の下あたりは、爆心地から離れていたためか、大けがを負わなかった人が多く、多くの人が死体を運ぶ手伝いをしていました。その兵隊さんは数日中に亡くなられたのではないのでしょうか。

やっとのことで夜中の何時か分かりませんが、海田<sup>かいた</sup>の駅にたどり着きました。海田から夜中に一回、西条方面へ汽車が出るかもしれないという情報があり、1時間以上も待ったのでしょうか。汽車に乗ることができました。ギュウギュウ詰めで西条に到着したら真っ暗闇<sup>やみだれ</sup>で誰が迎えに来ているのか分かりません。灯火管制<sup>あか</sup>の時代、電気や灯りをつけることが許されない時代でしたから、「大変だったね、大変だったらしいね」と言って迎える声ばかりで誰が迎えに来ているのか分からない状況でした。

## ■ 7日以降の様子

おじが比治山で働いていて被爆したらしいということで、おばと一緒におじの捜索へ広島に入りました。トラックに乗って向かったのか、どうやって市内に入ったのか記憶はあいまいですが、宇品<sup>うしな</sup>の方へ収容されているらしいとの情

報を頼りに7日の夜明けぐらいから出かけました。私は二中に3年間通ったおかげで市内の地理は頭に入っています。お婆の道案内をしなければと思ってお婆と出かけたのです。

宇品の収容所でおじを見つけることができました。収容所は宇品の港に近い倉庫だったと記憶しています。兵隊さんが「あっ、この人、今、息絶えちゃった。これ出しましょう」と渡り廊下へ遺体を並べていきます。また兵隊さんが「人が死なれたからちょっと、頭の方を持ってくれ」と私に言います。私はこわくて手伝えませんでした。2、3人で組んで息絶えた人を廊下へ出していくのです。20歳ぐらいの娘さんでもヤケドで真っ黒になっていたのですが、丸裸で寝かされていました。

宇品から西条までおじを連れて帰りましたが、3日後の10日に亡くなりました。家の近くの焼き場で焼きました。私も手伝いました。お婆は、2年前に亡くなりましたが、おじとは9年しか連れ添えなかったということでした。

## ■被爆後の生活

二中での授業が再開されたのは、10月末か11月に入ってからだったでしょうか。観音の元の二中があった場所に掘立て小屋を作って、雪が舞い込む、暖房がない中、震えながら授業を受けたのを覚えています。窓ガラスもない建物でした。観音に戻る前までは、海田の女学校校舎を借りたり、壊れていない小学校を借りて授業をおこなっていました。

私は進学を希望していたので、授業を受けないと単位がもらえません。寒いのを我慢して授業を受けました。掘立て小屋でも授業を受けられるだけありがたいと思ったものです。卒業は、旧制中学校のため5年生で卒業しました。昭和22年のことです。卒業後、千田町の広島工業専門学校へ進学しました。

工業専門学校を卒業後、自動車が少しずつ世の中に普及するようになった昭和30年代、自動車教習所をつくろうと思いました。知人と一緒にシャベルを持ってコースをつくることから始めました。工業専門学校で取得した単位を生かして、学科と実技の教官になるための資格を取りました。昭和35年から、市内の自動車教習所に勤め、主任教官をしました。

昭和41年に私は自動車教習所を辞めました。兄から老人ホームなどを経営したいので私に手伝ってほしいとの申し出があり、兄の事業を手伝うようになりました。兄は、医師会長まで務め、私は兄を誇りに思っています。兄ひとり、弟ひとりで経営をやってきたのに兄は、脳みやじまの血管ゆきが破れて亡くなってしまいました。残念で三日三晩眠れませんでした。宮島や湯来の施設を飛び回って、長い距離は、私が運転して病院長の兄を連れて行ったものです。私が運転しない

といけないと、使命感を持って兄を支えてきました。兄は学問一筋で私はスポーツマン、二人三脚でやってきました。兄が亡くなったことは本当に、本当に残念です。

### ■就職や結婚、後遺症について

私は、妻と結婚してもう少しで金婚式を迎えます。結婚の時、自分が被爆者であることを言うことは敬遠していました。被爆者への差別については心得ていたので、私は、妻にはあえて自分から「原爆にあったのは、あったけど、三菱で働いていて5キロ先南観音の端の方でちょっと受けて、けがも何もしてないよ」と言っていました。妻は、気にしていないようでした。息子は薬剤師をしています。知識もあるし、自分が被爆2世であることを自覚しています。息子や娘が誕生した時は、少しは心配しました。異常がないのをそおっと確認しました。

後遺症として心配したのは、被爆して10年もたって、首の後ろにコブができたことです。悪性ではなく良性の新生物と言うのでしょうか。大きなコブができました。コブができた場所は、被爆時後ろから光がきて、そのちょうど光が当たったところでした。手術してコブを取ってもらいましたが、また10年後コブができたのです。それから最近はまだコブはできません。コブができた以外に被爆したことが原因かと思われる症状は、歯が人よりも早く弱くなったことです。人によっては、髪が抜ける人もいるでしょう。人によってその症状は違います。私は、髪は抜けませんでした。ただ、みんなに共通して言えることは、被爆者はとにかく疲れやすいことです。就職した時、他の人と同じ仕事をしていても疲れやすい、上司に横着しているのではないかと疑われます。「みんなはこれぐらいの仕事をして疲れのないのに、あんたこれぐらいで疲れていたのでは、横着者じゃあないか」と叱られるのです。疲れやすいことは、仕事をする上ではとても不利なことです。

### ■平和への思い

若い世代に原爆や平和とは何かを伝える時、語る側の工夫も必要だと思います。原爆の瞬間は、アッという間に建物が倒れて、アッという間に人が亡くなった。それを伝えるために工夫しなければならない。ただ「大変だった、大変だった」「水くれ一言うのを水やらずに心残り。橋の下に火が迫ってくるのをそのまま逃げました」と言うだけでは、聞く方に伝わっていないと思うのです。「平和公園には資料館があります。行ってみてください。平和の木があります」と言うばかりでは原爆のむごさを伝えたことになりません。もしかすると聞く側にとって、原爆は、たいしたことではないのではと思わせるかもしれません。

先日、北海道で竜巻が起こり多くの方が亡くなりました。映像で見るとまさに原爆の瞬間に似ていました。現実味を帯びた強烈な映像でした。小さな子でもあの映像で伝わるのではないのでしょうか。原爆もあのように瞬間的に倒れ、燃え上がり20万もの人が亡くなったことを現実起こった災害からも伝えられることではないのでしょうか。

原爆投下後まもなく、毎日新聞や朝日新聞のプロのカメラマンが広島へ入って惨状をカメラに写しています。戦地へ何度も赴いている彼らさえも広島原爆ほど悲惨なものは他の戦地にないと言っています。その悲惨さを伝えていくにはどうすればいいか。私は、伝える者の伝え方を工夫する必要があると思います。

最後に、私は二中に在籍していたため、多くの下級生を原爆で失いました。また、最近、亡くなった同級生もいます。たった一人の兄も亡くなり、ひとりぼっちになった気持ちです。現在私は、体が不自由で妻に介護してもらっています。あと、2年は生きたい、そして、1週間に1回でも、2週間に1回でも、小さい子でもいい、小学生でもいい、思いっきり自分の今までのことを語ることができて最期を迎えることができれば一番幸せと思っています。